磐梯山･天狗岩左岩稜～東壁右岩稜

斎藤　憲一

■山行年月日:平成 30 年 3 月 3 日～4 日

■メンバー:斎藤憲一　堀江誠克

■コースタイム

3 日　スキー場終点 8:50～天狗岩左岩稜基部 10:30～終了点 15:30～BC16:30

4 日　BC7:00～東壁右岩稜基部 7:4～山頂直下終了点 14:30～火口壁下降点 15:30～デポ地点 16:00～駐車場 17:00

磐梯山におけるバリエーションの代表格は東壁であるが、櫛ヶ峰周辺にもいくつかの同様なルートがあって登ってきたが、天狗岩周辺にもその可能性を探っていて、今回は現地で目標を決定することにした。

しかしながら今回の山行には、気掛かりなことが二つあった。一つは私のコフラックのプラブーツが経年劣化であちこちが割れ始めていて、いつ完全に破断してしまってもおかしくない状況であること。そしてもう一つは、今回のパートナーが、あの過激な『堀江』であることである。果たして私は、この山行を無事に終えることができるのであろうか！？

3 月 3 日

今回のルートは、初日の天狗岩周辺から翌日の東壁をつなぐ計画である。アプローチにはスノーシューも準備したが、軽量化を重視して、スキーで裏磐梯からアプローチして、天狗岩基部にデポして登り、つぼ

天狗岩から左に延びるのが左岩稜

足でＢＣへ向かい、翌日は東壁を登って、火口壁の堀江が昨年下降した所からデポ地点へ戻るという、磐梯山のバリエーションでは、おそらく最も過激な継続のルートが設定されてしまった。

裏磐梯の火口壁に位置する天狗岩は北面であり、日射しの期待はできず、寒い中での登攀になることが恐ろしい。しかし、それにも増して恐ろしいのが、今回のパートナーであり、登攀ルートに関しても、天狗岩のいわば中央ルンゼを挟んで、右の岩稜は長くて顕著ではあるが、上部はただの雪面歩きになりそうだから、より困難そうな左の岩稜である『天狗岩左岩稜（仮称）を登るべ！』と、一方的に決定されてしまった。斎藤の『見栄えがして最もらしい右の岩稜にしたい』との思いを無視して！？

左岩稜の１Ｐ目は末端近くのルンゼ状から右へ回り込みながら稜上を目指すのだが、ほぼ垂直で不安定な岩もしっかり凍り付き、アックスを快適そうに決めながら堀江がリードする。２Ｐ目は稜上になるが、両側がストンと切れた土壁のナイフリッジで、とても立っては進めないので、思わずまたがって通過する。この先、稜は細かに砕けた岩が混じった土壁の急傾斜となり、とても登れる代物ではないので、左へトラバースするしかないのだが、壁にアックスを振っても、がっちり効かせることができず、不安定この上ない。『何でこんな嫌らしいピッチが俺の順番なんだ～～？』とケンは嘆きながら、何とか通過することができたのだが、このわずか４ｍの通過がこのルートの核心部となった最も渋い部分であった。更に小岩峰を右から回り込んで稜上へ戻ってピッチを切る。

天狗岩左岩稜１Ｐ目のミックス登攀

そして、３Ｐ目からはほぼ稜上の比較的安定した大まかな岩場を登り、60ｍロープ５Ｐジャストで天狗岩左に達して登攀終了となる。

後は沼ノ平入口に設置されているはずの、皆が待つＢＣ目指してつぼ足で急ぐ。ＢＣに着くとエスパースが３張り設置されていて、我々も入れるという。ツェルトでの一夜も覚悟していたのだが、何と有り難いことか！

3 月 4 日

東壁の右岩稜は今まで、スーパークーロワールから上部を、単独１回と堀江をパートナーにして１回。末端から小谷部をパートナーにして１回の、合せて３回登っている。勝手知ったるルートだと、さほど心配もせずに取り付いたのだが、今回は、過激なパートナーのことだ、敢えて最も困難な忠実に主稜を辿るルートを選択されてしまった。

右岩稜基部で準備をするが、空は快晴でジャケット無しでも暑いくらいだ。ロープを結んで、いつものようにまずは堀江がト

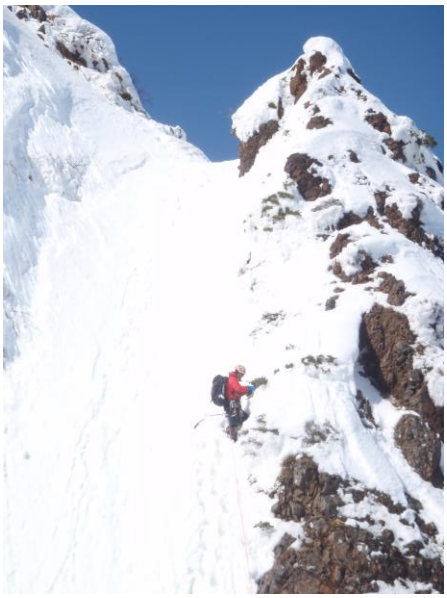
ップで登り始め、凹状の雪壁は順調に進むが、ロープが残りわずかとなった辺りでピタリと止まると同時にドンドン雪が落ちてくる。随分長い時間が掛かって、ようやくビレイ解除となって登っていくと、堀江はかぶり気味の雪壁の脇にある松ノ木上のキノコ雪で確保していた。大量の雪が落ちてきたのは、どうやらこの段差を越えるために雪を掻き落としたもので、そのために時間が掛かったようであり、斎藤もここを乗り越すのに苦労した。小谷部と登った時には、この稜上へのポイントが越せなくて少し戻ってから、凹角のどん詰まりを右から越えて進んでいたのだ。

２Ｐ目からは、キノコ雪となった完全な雪稜を忠実に登っていくことになるのだが、稜上は左右が完全に切れ落ちていて、特に左のスーパークーロワールまでは被り気味に 30mもあるだろうか、雪稜に乗っているのが非常に恐ろしい。ランニングはブッシュを掘り出しながら取り、何とか右の雪壁を回り込んでバンド状に行けないか覗いてみるが、とてもそんな所は探し出せず、結局ロープいっぱい延ばして、少し安定した松ノ木を掘り起こして、やはり狭いキノコ雪の上でビレイする。この地点から下部を眺めて堀江は『利尻の仙法師第二稜みたいだ！登ったことないけど！！』と言っていた。

３Ｐ目は、キノコ雪となった２m程の段差を下降しなければならないのだが、スリングを残置してこれにぶら下がって下り、ようやく何度も登ったＳクーロワールの最上部に達することができ、更に 10mロープを延ばして小岩峰でピッチを切る。

４Ｐ目は雪壁から大きな岩峰を左へ回り込み、凹角を登って岩峰の上へ出て、５Ｐ目は下り気味に最上部の岩峰基部へ進み、中央ルンゼの右の雪壁を山頂すぐ下の稜線へロープいっぱいで終了となる。

主稜線に出ると風が強いので、東壁側の風下で小休憩して下降点の火口壁へと向かう。下降地点のダケカンバに直接ロープをセットして 30m懸垂し、急傾斜の雪壁にアックスを打ち込みながらバックステップで下降していくが、昨日の道男さんのトレースがあり、最後の雪壁の乗っ越しの苦労が忍ばれる。

デポ地点まで戻ってスキーで滑って行くが、今にもプラブーツが破壊してしまいそうな斎藤は、慎重に滑り降り、スキー場の上に出た時には、ここからは例えインナーだけになっても何とか歩けると安堵したが、結果としてブーツが駐車場まで持ってくれて本当に良かったと思っている。そして何より、過激なパートナーとの過激なルートを登った今回の山行を、無事終えられたことに安堵している、と同時に内心ちょっとだけは感謝しているのであった。

東壁３Ｐ目のＳクローワール直下